

恩師訪問

佐藤

英先生



母校で勤務された方の近況をお伝えする「恩師訪問」。第九回目の今回は養護教諭の佐藤英先生。十一月六日(火)、同窓会館にお越しいただき、広報委員 植静子(平4年卒)がお話をうかがった。

秋田高校に勤務された時期と当時の保健室の様子をお聞かせください。

平成元年から七年までの七年間勤務して退職しました。

当時は秋高も十クラスあり、生徒数の一番多い時期だったのではないかと思います。保健室は当時から生徒の休養の場として、入れ替わり立ち代わり、息切れして疲れた様子の生徒がやってきては、ふうつと一息ついて元気になって戻っていききました。秋高生は優等生として過ごしてきた生徒も多く、息が続かなくなる時があるのですよね。でもホッと一息ついてがんばる力を蓄えたら、また復活していく、自分自身で調整する力があつたと思います。あまりメンバーが固定化しているという感じもなかったですね。ただ少しづつ、学校には来ても教室には行けないなど、不登校のはしりのような生徒も出

てきていました。秋高にいらつしやつたときが一番印象に残っていることを教えてください。

海外でボランティア活動

先生は職員会議で考査などの別室受験の必要性を訴えたとお聞きしましたが。

不登校という言葉が出始めた頃だったでしょうか。やつとの思いで登校しても、教室にはなかなか足が向かない生徒もおり、それでも学校に来られたことをよしとして、登校できる力を伸ばしていければと強く思いました。教室に入れなくても、テストを受ける機会を与えたいと思ったのです。職員会議の場で先生方にお話をし、そういう機会

上司と意見が合わず、悩んでいたことですね。当時校長が保健室の前に仁王立ちして、授業中に保健室にやってくる生徒を追い払うということがありました。生徒は何かしら用事があつて保健室に来ます。話を聞いて今すぐ処置が必要なのか、また後で出直すように指示するのか、判断するのは私なのに、校長はそれも聞かず、生徒を寄せ付けないようにしていました。そもそも元気なときには保健室には来ません。元気を保てないからやつて来るのに、その保健室の存在意義を理解してもらえず、とてももどかしい思いを

しました。保健室は開かれた場でなければならぬと直接教育論を戦わせたこともあり、先生、校長とけんかしたつてかと喜んで様子をうかがいに来たものでした。健康はきわめて個人的なことであり、周りにはわからないものです。まして、教師が判断するものではありません。自分自身の判断で保健室を利用すべきです。かえつて生徒のほうが保健室の在りようを理解し活用していたように思います。

で旦那さんを亡くした女性が生活していくための手段として活用できるようにミシンの使い方を教えたり、幼稚園の環境整備や医務室のお手伝いをしたりしています。先日は仏教のお坊さんたちに看護役として同行して、インドの仏教の発祥の地などをめぐる貴重な旅もしてきました。海外ボランティアに加えて、今は週に二回、近所にある障害者の作業所にお手伝いに行つています。明日はその作業所の遠足に一緒に行きます。みんな楽しみにしているんですよ。

退職後のために前もつて準備しておくべきだと友達にも言われていたけれど、私は器用ではないので、仕事はめいつぱいして、区切りをつけたから、一年間はゆつくりしました。

その後は、海外ボランティアで旧ユーゴスラビアの難民キャンプなどに出掛け、紛争

若者は海外に目向けよう

最後に現秋高生・元秋高生へメッセージをお願いします。

若いうちにどんな海外にも目を向けて、小さくま

もあつたけれど、目を閉じるときにいい人生だったと思えばいいなと思いますよね。私は今自分の人生を振り返つてもいい人生だったなと思えるから、幸せですよ。

変わらぬ元気で、とても素敵な英先生でした。